

心を耕す

村 上 み か

奨励者紹介〔むらかみ・みか〕

同志社大学キリスト教文化センター所長

同志社大学神学部教授

〔研究テーマ〕近世キリスト教史、宗教改革

「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」

（マタイによる福音書 13 章 18—23 節）

新しい年度が始まりました。皆さん、それぞれに新たな思いをもって勉強や学生生活を始められたことと思います。特に今年度からは多くの授業が対面になり、学内にも多くの学生が戻ってきて、にぎやかになりました。学生の皆さんが集まるだけで、大学がこんなに活気づくのかと、教員も職員も嬉しい思いでいます。学生の皆さんも久しぶりに多くの友人や仲間と再会し、明るく晴れやかな気持ちでおられるのではないのでしょうか。

さて、久しぶりにキャンパスに戻って学生生活を始めるにあたり、改めて同志社の教育のあり方を皆さんに思い出していただき、また考えていただきたいと思います。

同志社大学は、その創立の当初から専門的な知識や高度な技術を身に付けるだけでなく、身に付けた知識や技術を「良心」をもって用いることのできる、豊かな人間を育てることを、教育の理念として謳ってきました。教育を通して得たものを、自分のためだけに用いるのではなく、自分の力を「社会のために」、そして「世界のために」役立てることのできる、そのような人間が、この同志社から育つことが願われているのです。

そのような人間を育てるための教育を、同志社はキリスト教に基づいて行うことを、初めから考えていました。つまり知的な教育を行うと同時に、人間を育てる徳育、つまり心を育てる教育を行い、それをキリスト教に基づいて行う、ということが、「同志社大学設立の旨意」（1888年）にも述べられています。「同志社大学設立の旨意」は、その抜粋が入学式で読まれますので、皆さんも一度は聞かれているはずです。そこには、このように書かれています。「徳育智育二つながら並行して」行う。「基督教主義を以て徳育の基本」とする。この徳育のことを、新島襄は「心育」（心を育てる教育）とも表現しています。同志社では「人間を育てる」、そのために「人間の心を育てる」と、新島は考えていたのです。

知的な能力だけでなく、心も育てられ、両方を兼ね備えた人間になることは、皆さんもおそらく素敵なことだと思うでしょう。しかし、どのようにしたら、そのような人間が育てられるのでしょうか。何をしたらよいのでしょうか。

先ほどお読みいただいた聖書の箇所は、その問いに対するヒントを与えています。先ほどの聖書の箇所は前半がありますので、そこをまずお読みしたいと思います。マタイによる福音書 13 章 1—9 節、新約聖書の 24 頁です。それでは読みます。

その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」

これはイエスが語った種を蒔く人のたとえ話です。種を蒔いたところ、ある種は道端に落ちたので、鳥がそれを見つけて食べてしまった。ある種は石だらけで土の少ないところに落ちたので、すぐに芽を出したが、太陽の日に照らされて、焼けて枯れてしまった。ある種は茨の間に落ちたので、芽を出しても茨が伸びてきて、ふさがれて成長できなかった。それに対して、ある種は良い土地に落ちたので、豊かに実り、三十倍、六十倍、百倍にもなったという、そのようなお話です。

古代のイスラエルでは、大麦や小麦が栽培されたそうですが、当時は農耕技術が発達していなかったため、収穫量も多くなく、農民の生活は苦しく、食糧は貴重でした。そのため、貴重な種がちゃんと土の中に落ちず、芽を出さないで無駄になってしまうのは、とてももったいなく、残念に思われるという事情が、このたとえ話の背景にあります。農業技術が発達した今日では、そのように思われることは少ないかもしれませんが、ちょっとくらいどこかへ飛んで行っても、たくさん獲れるから大丈夫と、気にしないでしょ。もっとも、現在、ウクライナでの戦争の影響で、世界的に小麦が不足し、価格が高騰するだけでなく、地域によっては食糧危機にさえ陥る状況に直面しています。育たなかった種の貴重さ、残念さが、少しは想像できるかもしれません。

このうまく育たなかった残念な種とは、どのようなものなのでしょうか。それについて、先ほどお読みいただいた聖書の箇所解説されています。イエスの説明によると、最初の「鳥が来て食べてしまった種」というのは、「聖書の言葉」を心の中に蒔かれても、つまりイエスのよい教えを聞いても、それが理解できず、せっかくよい言葉がその人の心の中に入ったのに、奪い取られ、なくなってしまう、心が空っぽになってしまう、そのような状態のことを表します。つぎに「石だらけの所に落ちた種」というのは、聖書の言葉を聞いて、すぐに喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは聖書の言葉をもち続けても、何かがあると、すぐに枯れてしぼんでしまう、たとえば初期のキリスト教徒に見られたように、困難や迫害を経験すると、すぐに離れてしまう人、つまりいてしまう人のことだ、と言われます。また「茨の間に落ちた種」とい

うのは、聖書の言葉を聞くことはするけれども、いろいろな障害物が現われて、ふさがれてしまう人のことです。たとえばこの世の思い煩いでいっぱいになり、人のことを気にしたり、見栄を張ったり、余計なことに気を遣って疲れてしまい、大切なことに到達できない状態、あるいは富などへの欲望により、大切なことが見えなくなっている状態です。心の中によい芽が出かかっても、人間の心はすぐに空っぽになったり、しおれたり、あるいはいろいろな思いや欲望でぐちゃぐちゃになってしまうようです。

それに対して、「良い土地に落ちた種」というのは、聖書の言葉を聞いてそれを理解して悟る人、人間にとって本当に大切なことが分かって、それを大事に育てることができる人のことだと、イエスは説明しました。聖書の言葉には、よく分からないところもあるけれども、しかし何か大切なことが言われていて、それを自分の中に受け止めて、考えてみよう、それと向き合ってみようとする人、そのような心をもつ人は、いつか良い実を結び、三十倍にも六十倍にも百倍にも豊かになるのだ、とされているのです。

このお話から、人として豊かに実を結ぶためには、心の畑を耕すことが大切であることが分かります。私たちは、日頃から意識的に、心を大切に耕さなければならない、ということです。思い煩いや欲望に押しつぶされないよう、時には肥料を与えるのもよいでしょう。美しい自然の中に身を置いたり、よい音楽を聴いたり、素敵な絵を見たり、あるいはよい本を読んだり、よいエネルギーをもった人とお話したり、あるいは心を静かにして祈るのもよいでしょう。心が空っぽになり、また混乱しそうな時には、よいものに触れ、祈って、心を豊かな状態にするよう、努力してみてください。そうすると、聖書の言葉がそこに入ってきて、豊かに実り、その人全体、その人の人生そのものが、豊かになることでしょう。

この豊かな実り、というのは、どのようなものでしょうか。それは、一般に考えられるような成功とは異なります。つまりよい成績やよい評価を得る、あるいは社会的な名誉や地位を獲得する、といった多くの人が求める成果とは異なります。それは、イエスの教えた「愛」が実ったもの、神を愛し、真理を愛し、隣人を愛し大切にすることから生まれる豊かな生活であり、愛に満ちた豊かな人生であるのです。そのような、人としての豊かさをもった人間が、この同志社から育ち、同志社で身に付けた知識や技術をもって、周囲の人々や社会、そして世界に奉仕する、自分の持っているものを差し出して、周囲を豊かにする、そのような働きがなされるようにと願われ、同志社の教育が行われているのです。

春学期がまだ始まったばかりですが、学生の皆さんの様子を見ていて、皆さんがこの大変な2年間、心を耕してこられたのだな、と感じています。これまで新学期の最初の授業は、まだ慣れないせいか、教室はシーンと静まり返って、なんとなく緊張した、よそよそしい空気が流れていたように思います。しかし、今年は違いました。ほかの学生と出会えたことを心から喜び、前向きに、積極的に考え、行動する意欲が一人おひとりの中に窺えました。いつもあるような、人目を気にすることや見栄や恥ずかしさといった、この世の思い煩いが嬉しさで吹き飛んで、純粹にそこに一緒にいることを喜べる素直さが感じられたのです。これは皆さんが2年間、耐えたからこそ現れたもので、聖書の教えに通じたものがある、と思いました。心を耕すためのもっとも効果的な肥料は、苦難を耐えることかもしれません。苦難に押しつぶされずに、それを受け止め、それと向き合う中で大切なことを求め続ける、そのような中で、心が耕されて豊かになり、大切なことが分かるようになる。そしてやがて良い実をつけるのだと思います。

そのような経験をなさった皆さんは、素敵な社会人になるのではないかと楽しみにしています。コロナ禍の状況が改善しても、どうぞ心を養い続けてください。そして同志社で育てられた者として、社会で、そ

して世界で、良い働きを広げていていただきたいと思います。

最後に、同志社の卒業生で、そのような豊かな働きを行ったある牧師をご紹介します。彼は兵庫県の尼崎にある教会の牧師をしていた種谷俊一という人です。彼は同志社大学神学部の卒業生で、今から52年前の1970年に警察に逮捕されました。当時は、学生運動が盛んで、これが高校にまで及び、彼の教会に来ていた高校生とその友人がこの高校紛争に関わって、建造物侵入や凶器準備集合の罪に問われ、警察に追われていました。そして種谷牧師は、この2人が警察に追われていることを知りながら、彼らを匿い、これが犯人を匿った罪にあたるとして、逮捕されたのです。彼がなぜそのような行為をなしたのかというと、牧師として、人々の魂に配慮することが自分の任務と考えたからです。混乱の中で過ちを犯した若い魂が救われるためには、今、警察に彼らを突き出すのではなく、しばしの時間を彼らに与え、自らを省みる時をもつことが必要だと考えました。そして彼らに労働をさせ、その中で反省する機会を彼らに準備したのです。そして8日後、高校生2人は自ら警察へ出頭しましたが、種谷牧師の罪が問われ、裁判になったのです。牧師としての信念に基づいて行動したとはいえ、この事件は、彼に多くの苦悩をもたらしました。警察に逮捕されること自体、大きな苦痛をもたらすものでありますが、さらには、彼の教会の多くの信徒たちが、警察に逮捕されるような牧師のいる教会にはいられないと言って、去っていきました。当時の彼は、自分の身に降りかかってくる困難に、どうしたらいいだろうと気を落として日々を過ごしていたそうです。私も何度か彼に会ったことがありますが、彼は自分の信念をもって、勇ましく警察に立ち向かっていくという感じの人ではなく、優しく穏やかで、繊細さをもった人のように見えました。そのような彼を勇ましい行為へと向かわせたのは、聖書の言葉でした。人々の困難を自分のものとして引き受け、自分に出来る最善の行為を行うということ、イエスの教える愛の行為を彼は行ったのです。その彼の行為を周囲の人々、そして教会の人々もなかなか理解しませんでした。同志社の教員をはじめとするクリスチャンの学者たち、すなわち憲法学者、政治学者、神学者、また牧師たちが彼を支援し、励まし、裁判では証言台に立ち、彼を擁護しました。

そのような彼に、裁判は無罪の判決を言い渡しました。判決はこのように言っています。牧師の仕事は伝道し、人々の魂に配慮し、そのことによって社会に奉仕するものである。そこで迷える羊が出れば、何をおいても彼の魂を配慮し、その人が人間として成長していけるように配慮せねばならない。これは牧師の義務であり、職務上の責任である。したがって彼の行為は正当な業務行為として認められる。そして、憲法で信仰の自由が保障されている限り、国家は（つまり警察は）宗教上の行為に最大限の考慮と寛容をもって接しなくてはならない。（神戸簡判昭和50年2月20日 牧会活動事件判決より）この判決は、国家権力に対して憲法の信仰の自由を護ろうとした、重要な判決と評価されています。今でも憲法の教科書には、この判決が取り上げられていて、法学部の学生たちはこれを学びます。

種谷牧師の行為は、まさに聖書の言葉に養われた豊かな心、良心に導かれたものでした。自分の身に危険が及んでも、一人ひとりを大切にすることを自らに課し、そのために身を捧げる、奉仕するあり方です。彼の行為は、匿われた二人の高校生だけでなく、多くの人に豊かさと希望を与えました。彼のこの裁判を通して、人間にとって何が大切なことであるのか、多くの人が考えさせられ、教えられたのです。新島襄も、そのような豊かさと希望をこの地に作り出す若者を育てようと願いました。このことをどうか覚え

て、日々の勉学や活動にお励みください。

2022年4月 13 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録